

## 第8章 「キャリアプランニング能力」とキャリア教育諸活動との関連

### 1. 「キャリアプランニング能力」の構成要素

「キャリアプランニング能力」は「基礎的・汎用的能力」のうちの一つであり、「高等学校普通科におけるキャリア教育の実践と生徒の変容の相関関係に関する調査研究」（以下、「変容調査」）では、以下の六つの質問項目によって測定されている。

- ① 勉強をすることの意味について自分なりの考えを持っている
- ② 仕事をするすることの意味について自分なりの考えを持っている
- ③ 世の中には、様々な働き方や生き方があることを理解している
- ④ 職業や働き方を選ぶ際に、どのように情報を調べればよいかわかっている
- ⑤ 将来の夢や目標が具体的にになっている
- ⑥ 将来の夢や目標に向かって努力している

これらの問いに対して、「あてはまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の四つの選択肢から回答を求めたところ、「あてはまる」「ややあてはまる」を選択する割合は、いずれの項目においても、調査の進行とともに高くなる傾向が見られた。『変容調査報告書』では、以下の図によってそのことが示された（図1）。

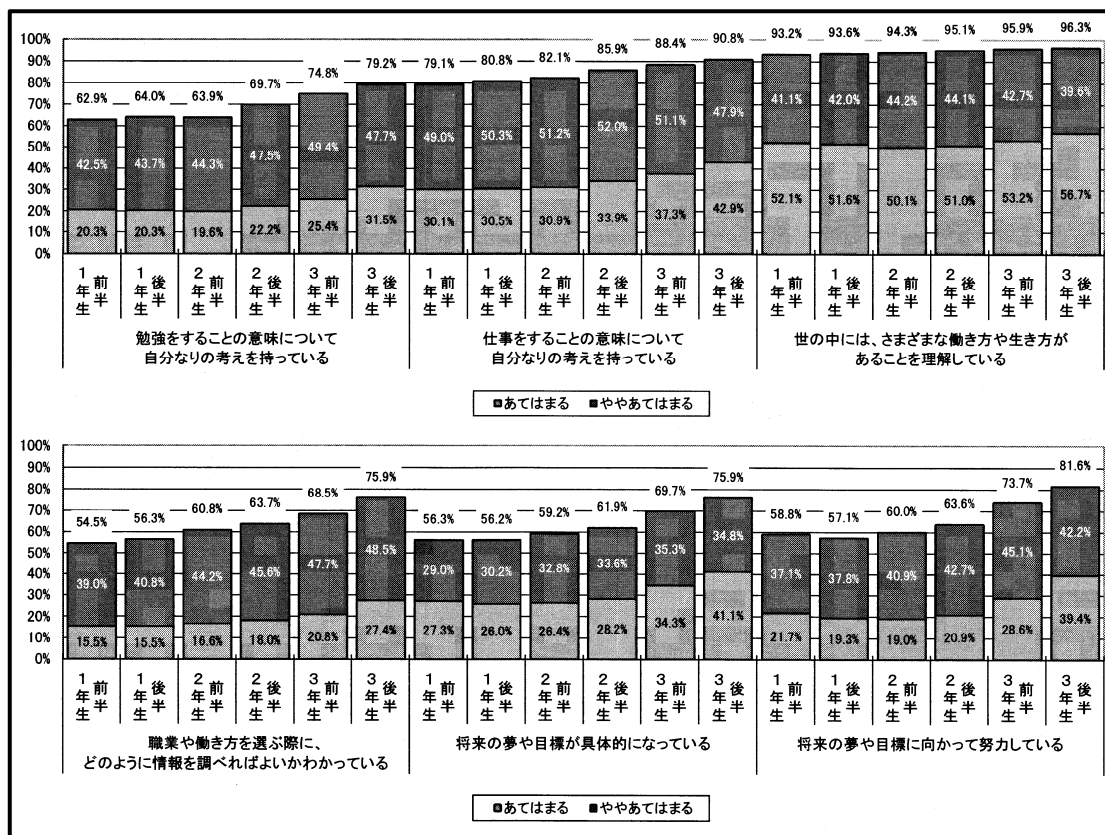


図1 「キャリアプランニング能力に関する設問の集計結果

（出典：『変容調査報告書』14ページ）

「①勉強をすることの意味について自分なりの考えを持っている」「④職業や働き方を選ぶ際に、どのように情報を調べればよいかわかっている」「⑤将来の夢や目標が具体的にになっている」「⑥将来の夢や目標に向かって努力している」の四つの項目では、1年生前半の時点での5～6割の水準から3年生後半の時点での7～8割の水準へと上昇している。また、2年生後半から3年生にかけての時期の伸び率が大きく、進路の展望がこの時期に明確化することが推測された。加えて、変化の幅が相対的に小さかった「②仕事をするこゝの意味について自分なりの考えを持っている」「③世の中には、様々な働き方や生き方があることを理解している」の2項目についても、「あてはまる」の割合は上昇傾向にあることが指摘された。

これらの結果から推し量ることができるのは、「高等学校生活の3年間を通じて、自身の進路についての考え方や職業に対する考え方が高まった生徒が多い」ということである。

それでは、これらの諸要素は高等学校生活に関する意識・態度とはどのような関係にあり、また、キャリア教育の諸活動とはいかなる関連をもつのだろうか。以下ではこれらの点について概観する。

## 2. 六つの構成要素と高等学校生活に関する意識・態度の相関

「変容調査」では、高校生の「生活の充実度」「意欲・態度」「学ぶことについての意識・意味付け」「職業観・勤労観」についての問いも設定されている。例えば「学校生活は充実している」「自分の能力をいかせる仕事がしたい」といった項目に対して、「あてはまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の四つの選択肢から回答を求めている。

これらの回答と、キャリアプランニング能力の構成要素に対する回答との相関を求めると、その結果からは以下のことを指摘することができる（詳細は、参考資料付表8-1を参照）<sup>(注1)</sup>。

まず総じて、キャリアプランニング能力の構成要素と高等学校生活に関する意識・態度が、高等学校生活の進行に伴って次第に互いの関わりの強さを増していることである。先に確認したように、キャリアプランニング能力は高等学校3年間を通じてポジティブな反応を示す生徒の割合が高まる傾向にある。すなわちそれに伴って、学校生活や職業についてもポジティブな意識や意欲が表明される割合が次第に高まっていることになる。

キャリアプランニング能力の構成要素ごとに、関わりの強い項目を整理すると、以下のようになる。

### ①勉強をすることの意味について自分なりの考えを持っている

- ◇ 「家での学習に積極的に取り組んでいる」
- ◇ 「学校で（これから）たくさんのことを学びたいと思う」
- ◇ 「学校での勉強はふだんの生活を送る上で役に立つと思う」
- ◇ 「学校での勉強は将来の仕事の可能性を広げてくれると思う」
- ◇ 「学校での勉強は将来の生活を豊かにすると思う」

### ②仕事をするこゝの意味について自分なりの考えを持っている

- ◇ 「学校で（これから）たくさんことを学びたいと思う」

- ◇ 「自分の将来が楽しみだ」
- ◇ 「自分の能力をいかせる仕事がしたい」

③世の中には、様々な働き方や生き方があることを理解している

- ◇ 「学校で（これから）たくさんのことを学びたいと思う」
- ◇ 「自分の能力をいかせる仕事がしたい」

④職業や働き方を選ぶ際に、どのように情報を調べればよいかわかっている、⑤将来の夢や目標が具体的にになっている、及び、⑥将来の夢や目標に向かって努力している

- ◇ 「自分の将来が楽しみだ」

「⑥将来の夢や目標に向かって努力している」ことは、とりわけ「自分の将来が楽しみだ」との関わりを強く示しており、また非常に多くの高等学校生活に関する意識・態度の項目と強く関わっていることがわかる。

さらに、「自分の将来が楽しみだ」への回答は、キャリアプランニング能力の構成要素の全てと強い関わりがある。

これらのことから、「キャリアプランニング能力」が高められることは、学校生活や将来のビジョンに対してもポジティブであることと、直接的に関わり合っていると指摘できる。

### 3. 「職業・働き方についての情報源の理解」の変容パターン

ただし、キャリアプランニング能力の構成要素や、高等学校生活に関する意識・態度は、生徒個人の中で必ずしも累積的に高められていくものではない。確かに、これらの質問項目に対して「ポジティブに回答する者の割合」は調査が重ねられるにつれて高まるが、それは回答者一人一人の中で「一度ポジティブな状態になれば以降もそれが持続する」ことを意味してはいない。

このことを確認するために、ここではキャリアプランニング能力のうちの「④職業や働き方を選ぶ際に、どのように情報を調べればよいかわかっている」に着目したい。キャリア教育の最重要成果の一つは、生徒が職業に至り付く経路を具体的に見いだせるようになることであるため、この指標に注目することには重要な意味がある。

「④職業や働き方を選ぶ際に、どのように情報を調べればよいかわかっている」の問いに対して、「あてはまる」「ややあてはまる」の回答を○、「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の回答を×とし、○×の変遷を表現するためのタイプを作成した。タイプごとの回答者数を示したのが、表1である。

ここからは、ある調査で○と表明したけれども次の調査では×と表明されるケースが、決して少なくないことがわかる。例えばタイプ43番は、第1回調査から第6回調査にかけて、「×→○→×→○→×→○」と非常に激しく回答が移り変わっている。一方、一度○を表明し、以後もそれが持続したケースをタイプ1番、33番、49番、57番、61番、63番と考えると、その回答者総数は13,151人であり、全体に占める割合は44.5%である。

このことから、「キャリアプランニング能力の高まり」と一口に言っても、個人のレベルでは進路の決定や変更、そのほか様々な生活経験により、揺れ動いていることが推測できる。生徒における資質・能力や意識・態度は、このような個々人における意味の捉えられ方と重ね合わせながら評価される必要がある。

なお、第1回調査から第6回調査にかけて、全て○を表明した回答者の数は 7,889 人 (26.7%) であった。また逆に、全ての調査で×を表明した回答者の数は 2,210 人 (7.5%) であった。後者のタイプの生徒については、詳細な背景の探索が別途必要と思われる。

表 1 理解の変容パターン

(「職業や働き方を選ぶ際に、どのように情報を調べればよいかわかっている」)

タイプ	1年前半	1年後半	2年前半	2年後半	3年前半	3年後半	度数	%
1	○	○	○	○	○	○	7889	26.7
2	○	○	○	○	○	×	359	1.2
3	○	○	○	○	×	○	508	1.7
4	○	○	○	○	×	×	136	.5
5	○	○	○	×	○	○	678	2.3
6	○	○	○	×	○	×	132	.4
7	○	○	○	×	×	○	181	.6
8	○	○	○	×	×	×	100	.3
9	○	○	×	○	○	○	791	2.7
10	○	○	×	○	○	×	107	.4
11	○	○	×	○	×	○	188	.6
12	○	○	×	○	×	×	87	.3
13	○	○	×	×	○	○	317	1.1
14	○	○	×	×	○	×	88	.3
15	○	○	×	×	×	○	192	.6
16	○	○	×	×	×	×	161	.5
17	○	×	○	○	○	○	1264	4.3
18	○	×	○	○	○	×	129	.4
19	○	×	○	○	×	○	226	.8
20	○	×	○	○	×	×	76	.3
21	○	×	○	×	○	○	299	1.0
22	○	×	○	×	○	×	66	.2
23	○	×	○	×	×	○	135	.5
24	○	×	○	×	×	×	108	.4
25	○	×	×	○	○	○	411	1.4
26	○	×	×	○	○	×	86	.3
27	○	×	×	○	×	○	180	.6
28	○	×	×	○	×	×	104	.4
29	○	×	×	×	○	○	343	1.2
30	○	×	×	×	○	×	134	.5
31	○	×	×	×	×	○	294	1.0
32	○	×	×	×	×	×	391	1.3
33	×	○	○	○	○	○	1787	6.0
34	×	○	○	○	○	×	169	.6
35	×	○	○	○	×	○	228	.8
36	×	○	○	○	×	×	84	.3
37	×	○	○	×	○	○	332	1.1
38	×	○	○	×	○	×	80	.3
39	×	○	○	×	×	○	164	.6
40	×	○	○	×	×	×	113	.4
41	×	○	×	○	○	○	473	1.6
42	×	○	×	○	○	×	106	.4
43	×	○	×	○	×	○	166	.6
44	×	○	×	○	×	×	91	.3
45	×	○	×	×	○	○	290	1.0
46	×	○	×	×	○	×	117	.4
47	×	○	×	×	×	○	253	.9
48	×	○	×	×	×	×	306	1.0
49	×	×	○	○	○	○	1011	3.4
50	×	×	○	○	○	×	176	.6
51	×	×	○	○	×	○	259	.9
52	×	×	○	○	×	×	128	.4
53	×	×	○	×	○	○	419	1.4
54	×	×	○	×	○	×	131	.4
55	×	×	○	×	×	○	278	.9
56	×	×	○	×	×	×	287	1.0
57	×	×	×	○	○	○	706	2.4
58	×	×	×	○	○	×	167	.6
59	×	×	×	○	×	○	375	1.3
60	×	×	×	○	×	×	324	1.1
61	×	×	×	×	○	○	738	2.5
62	×	×	×	×	○	×	410	1.4
63	×	×	×	×	×	○	1020	3.5
64	×	×	×	×	×	×	2210	7.5
合計							29558	100.0

#### 4. 「職業・働き方についての情報源の理解」の変容の背景

それでは、生徒の資質・能力や意識・態度の変容の背景にはどのようなことがあるのか。ここでは引き続き、キャリアプランニング能力の中の「④職業や働き方を選ぶ際に、どのように情報を調べればよいかわかっている」を検討対象とし、回答の変容パターンに対して、キャリア教育の諸活動がどのように関わっているのかを示したい。

回答の変容を把握するために着目したのは、以下の時期である。

- 高等学校1年時の変容  
第1回調査（1年生前半）から第3回調査（2年生前半）への変化
- 高等学校2年時の変容  
第3回調査（2年生前半）から第5回調査（3年生前半）への変化
- 高等学校3年時の変容  
第5回調査（3年生前半）から第6回調査（3年生後半）への変化

それぞれの2回の調査のあいだで、「④職業や働き方を選ぶ際に、どのように情報を調べればよいかわかっている」への回答がどのように推移したかにより、回答の在り方を四つのパターンに分類した。「わかっている」状態の持続（○→○：理解の持続）、「わからない状態」の改善（×→○：理解の改善）、「わかっている」状態の断絶（○→×：理解の断絶）、「わからない」状態の持続（×→×：無理解）の4パターンである。

そしてこの回答の推移と、キャリア教育に関する七つの活動の取組状況<sup>(注2)</sup>、及び「卒業後の進路希望」の決定状況<sup>(注3)</sup>との関わりを探索した。分析の結果からは以下のことを指摘することができる（詳細は参考資料付表8-2を参照）。

●**進路希望** 1・2・3年時のいずれの時点においても、「進学したい、就職したい」と決まっていることは、「職業・働き方についての情報源の理解」の持続と改善に有意な関わりをもっている。

●**キャリアプラン等の作成** 1年時においては、「職業・働き方についての情報源の理解」の持続と改善に有意な関わりをもつが、2年時においては理解の持続のみに関わることとなる。そして3年時においては有効な関わりが見いだされなくなる。

●**キャリア・ポートフォリオの作成・活用** 1年時・2年時においては、「職業・働き方についての情報源の理解」の持続のみに関連するが、3年時においてはそれに加えて理解の改善にも関連する。

●**上級学校の教員や社会人講師による出張授業・講演会** 1年時においては、「職業・働き方についての情報源の理解」の持続と改善に関連するが、2年時・3年時においては理解の持続のみに関連する。

●**卒業生（大学生や若手社会人など）による講演・体験発表会・懇談会** 1年時においては、「職業・働き方についての情報源の理解」の持続と改善に関連するが、2年時においては有効な関わりが見いだされなくなる。さらに、3年時においてはこれを実施していないことの方が理解の持続に関連することとなる。3年時にこれを実施することは、理解の改善に関連する面はあるが、他方で理解の断絶や無理解と関わることとなる。

●就業体験（インターンシップ） 「職業・働き方についての情報源の理解」に関しては、1年時・2年時では一定の方向性をもった関わりは見いだされない。3年時においては、これを実施しないことの方が理解の持続に関連する。逆にこれを実施することは、理解の改善に関連する面はあるが、他方で理解の断絶や無理解と関わる面も生じることとなる。

なお、「上級学校のオープンキャンパス等への参加」と「職場見学・ジョブシャドウイング」については、どの学年においても「職業や働き方を選ぶ際に、どのように情報を調べればよいかわかっている」ことに対しては有効な関わりは見いだされなかった。

以上のように、キャリア教育の諸活動と「キャリアプランニング能力」の構成要素との関わりは、活動内容や、それが実施される学年によっても、様々な関わり方が見いだされる。生徒の資質・能力及び意識・態度に対する教育活動の寄与を考える際には、その活動の性質と実施対象学年のマッチングが重要だといえる。

(注1) 「キャリアプランニング能力の構成要素」と「高等学校生活に関する意識・態度」に関する質問への回答を、「あてはまる」=4、「ややあてはまる」=3、「あまりあてはまらない」=2、「あてはまらない」=1と数量化し、両者の相関係数を求めた。付表8-1では、キャリアプランニング能力の六つの構成要素ごとに、全6回分の調査データから求められる相関係数を示しており、第6回調査において相関係数が0.3を上回っている項目について、白黒反転させた強調表示をしている。

(注2) 1年時の取組を把握するためには、第2回調査（1年生後半）での実施状況を参照した（「今年度予定」も実施に含めた）。2年時の取組を把握するためには、第4回調査（2年生後半）での実施状況を参照した（「今年度予定」も実施に含めた）。3年時の取組を把握するためには、第6回調査（3年生後半）での実施状況を参照し、その時点での「今年度予定」は「実施していない」に含めることとした。これによって、各学年におけるキャリア教育諸活動の実施の有無を把握した。

(注3) 第3回調査（2年生前半）での「進学したい、就職したい」と考えるか否かを1年時での変容パターンの分析に、第5回調査（3年生前半）での結果を2年時での変容パターンの分析に第6回調査（3年生後半）での結果を3年時での変容パターンの分析に用いた。